

東京バッハ合唱団 月報

[第 592・593 号] 2011 年 10 月・11 月合併号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.592-593

October - November 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

東京バッハ合唱団創立 50 周年

バッハ合唱団をとりまく人々 [第 6 回]

BACH-CHOR
TOKYO
50
1962-2012

東京バッハ合唱団
2012 年 7 月 創立 50 周年

大村 恵美子

今回は、恩師の方々をまとめてみます。

池内友次郎先生

高校からどのように進学しようかと迷って、まず考えたのが、そのころ出来たばかりの新制・東京芸術大学でした。まだ全貌もはっきりしない中で、とりあえず作曲科進学をめざし、池内友次郎先生（1906 91）に個人指導を仰ぎました。しかし受験直前に、楽理科のほうが広く学べるかもしれないと心変わりして、そちらに入りました。そこで4年、そして大学院の前身として生まれた1年制の専攻科に学んでも、期待したほどの満足はなく、思い切り悪くも、また作曲科に入りなおしたのです。池内先生には、受験準備期間と4年間の作曲科時代、たっぷりお世話になり、その間には、私の留学2年もふくまれました。先生が和声法などの著作をなさるときには、毎日のご自宅に、口述筆記など仰せつかりました。ご承知のように、俳句の高濱虚子のご子息である先生は、日本語の使い方にも要求が多く、それは後年、私が文章を書くうえで非常に影響を受けることになりました。

楽理科の恩師方

楽理科では、私は音楽美学専攻で、その担任教授は野村良雄（1908 94）先生でした。私は楽理科の3年目に、すでに卒論規模のものを書いて、先生にお見せしていたので、以来先生は惜しげもなく、知識と学び方を注入してくださいました。フランスのテゼ共同体（1983年第1回のヨーロッパ演奏旅行で訪問）のことなども、私はこの先生から早くに教えられていたのです。

服部幸三、神保常彦、辻莊一、遠山一行の先生方にも、私は近づいて積極的にお教をいただきました。遠山一行先生（1922生）には、高校時代から、音楽エッセイの文章を見ていただき、弟君の遠山信二氏（1923 86）主宰の宗教音楽研究会合唱団にもさそっていただいたし、東大美学より芸大のほうが面白いでしょう、とお勧めいただいたりもしました。

辻 莊一先生（1895 1987）は、私の作ったバッハ合唱

団を愛してくださって、始めから様々にご協力くださり、また楽しんでいただきました。先生のおかげで、目白聖公会で、その後今日にいたるまで練習させていただくことにもなったのです。後述する杉山好先生（次ページ）は、辻先生を「この合唱団の精神的な生みの親」と称してくださっていますが、1987年のご逝去に際し、「キリスト新聞」に追悼文を請われ、この部分も引用させていただきました（1987.7.18号）4半世紀をへて、これも貴重な「史料」となってしまいましたので、後に紹介させていただきます（月報 p.8）。

服部幸三先生（1924 2009）は、私が作曲科在学中にストラズブールに留学したころ、フライブルクに数年いらして、よく、合唱団創設の話にものってくださいたりしました。私は、バイクで、ライン川をわたって独仏間を何度も往復しました。

神保常彦先生は、野村先生とともに、私の卒論仕上げを綿密にたすけてくださいました。1977年、先生の還暦祝いの席で、私は公けに初めて合唱団を指揮し、1979年の定演からの指揮活動へとつながってゆきました。



辻莊一先生、芸大楽理科の講義風景（1980年代）

シュヴァイツァー『バッハ』

1958年、白水社から発行された「シュヴァイツァー著作集」第13巻のあとがき中の一節（「本書の紹介がきっかけとなって、……いつの日か日本語で、しかもバッハ音楽を殺すことなく、カンタータや受難曲が歌われるようになることを、訳者一同念じてやまない」p.417、内垣啓一氏記）が、私の合唱団づくりに、直接点火させたことは、『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』に書いたとおりです。その共訳者が、浅井眞男、内垣啓一（1925 89）、杉山好のお3方でした。私は、自分の意志を固めたくうえで留学したので、旅行中に、偶然にもヴェネチアのサンマルコ広場で、浅井眞男氏（1905 87）と初にお目にかかり、とてもうれしく、感動しました。

留学からの帰国後、杉山 好先生（1928 2011.9.10 [当原稿の編集作業中に、訃報に接しました：編集部]）からは、辻荘一先生におとらぬ全面的なご協力をいただき、モテット全曲のゼミ合宿や、講演、解説執筆など、絶えずお願いするようになりました。東大教養学部に、杉山先生方のご尽力でパイプオルガンが設置されてからは、2度にわたって、モテットの演奏会を開かせていただきました。小学1、2年の2年間、同級生だった小田島雄志氏（1930生。シェイクスピア学者）と、数十年ぶりに出会わせていただいたのも、この場でのことでした。本年3月発行の『バッハ コラール・ハンドブック』は、先生の絶大なご協力のおかげで、世に出すことができました。

後援会発起人の方々

1962年に合唱団が生まれたとき、私はまだ芸大の学生であると同時に、日本キリスト教団出版部の「礼拝と音楽」誌の編集員も兼ねていました。由木康牧師（1896 1985。讃美歌「きよしこの夜」の訳詞者）、田中忠雄氏（1903 95。洋画家）とは、その編集メンバーとして毎月お会いしましたが、そのご縁で、合唱団の将来には後援会が必要なことを主張してくださり、その結果、服部幸三、向井潤吉（1901 95。洋画家）、田中忠雄、辻荘一、由木康氏ら、5人のそうそうたる方が発起人となってくださったのです。辻、由木両先生をのぞくお3方とは、私の留学中にフランスに来られ、そこでの楽しい思い出もできましたが、そのころから私は、どんなに偉い方々にも臆せず話しかけたり、ご助力を願ったりする傾向があったようで、まわりにはご迷惑も多かったかと思いますが、私自身は、こんなに長い年月を重ねても、大きな感謝と幸福のうちに思い出することの多さに、われながら驚くのです。

磯谷 威先生

芸大でお会いした中で、とりわけ私の心の奥底に残っているのは、磯谷威先生（1915 76）です。前出『三十年の歴史』でも、p.70以下その他で述べたように、芸大受講科目で発声の個人レッスンが始まってすぐ位に、私



杉山好先生と筆者。先生のお宅にて（2009年1月）

は自分の属していた教会聖歌隊、ついでバッハ合唱団のために、先生にレッスンをお願いし、先生も二つ返事でいらしてくださいました。映画監督の大島渚氏が、新聞紙上で書かれ、先生の本質を見抜かれたとおり、人間と人間の、時空をこえた深处での交流のすばらしさを、先生によって体験させられた者は、たえようもない幸運者です。当時の合唱団のみんなが、それを学びました。

「バッハ・ゼミナール」

「礼拝と音楽」誌の主催で、短期間に開催された「バッハ・ゼミナール」で知己を得たのが、深津文雄（1909 2000。婦人保護施設「かにた婦人の村」創設者、牧師）、高橋昭（音楽評論家、レコード評で活躍）両先生で、このお2人から、合唱団も長期にわたって、辛抱づよいご教育を授かることになりました。この経緯も『三十年の歴史』に詳述しました（p.60以下）。文雄先生のご子息、深津大慈さんも合唱団に加わって、ひとこまごとに私たちの歴史は、色彩ゆたかに積み上げられ、この短いスペースにはどのようにしても収められないのが残念です。
(主宰者)

当連載は、合唱団創立30周年を機に上梓した『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』大村恵美子著、国際文化出版社・1992年刊)に登場した方々(合計171名)を中心に取り上げながら、その後の関わりもふくめて、半世紀の回想を綴ってみようとするものです。

上記書は、すでに絶版となっていますが、事務局に若干の在庫がございます。送料込み1500円(定価3000円)にてお届けいたしますので、ご希望の方はお申し出ください。

<訃報>

9月10日、杉山好先生がお亡くなりになりました。奇しくも恩師の方々を想っていたところでした。“合唱団の精神的な生みの親”辻荘一先生を失って4半世紀、いま“育ての親”をお送りすることになってしまいました。ご冥福をお祈りいたします。

稿を改めて、追悼をさせていただくつもりです。

バッハを合唱するということ

(口短調ミサ曲)のいろいろな演奏に触れながら

村山 英司(団員)

1. リヒターの演奏

バッハの声楽曲を自宅で練習する際に参考に聴くCDは、何とはなしにK・リヒターとミュンヘン・バッハ合唱団の演奏に落ち着くことが多い。以前は、正統的なおもしろみのない演奏で過剰な精神性に辟易し、リヒターの演奏をあまり評価していなかった。むしろ古楽器による典雅な響きやアタックの強いきびきびした演奏を好んだ。自分で歌うようになってからは声楽曲が中心になり、同時にリヒターの演奏に対するとらえ方が変わってきた。むしろ、落ち着いたテンポで実に無理なく歌っているように聞こえてきた。

確かにリヒターのバッハ宗教曲の演奏は「普遍的な説得力をもって迫ってくる」(野中裕『カール・リヒター論』春秋社、2010)と感じられる。キリスト教に対する信仰心とは無関係に、ある種の厳肅さが受けとめられる。その根幹をなす合唱団をあえてアマチュアにしたことは、「むしろ、俗にいうアマチュアの方が、はじめはおっかなびっくり歌っていますが、一生懸命に勉強もしますし、虚心に全体にとけ合おうと努力もいたします」(同書、1969年来日時のリヒターへのインタビュー)から考えると、集団としての力をもとめた結果であると考えられる。そして、ミュンヘン・バッハ合唱団の完成度の高さと持続性はひとえに鍛錬にかかっていたといえよう！リヒターの精神性はどこに起因するのか。それは徹底である。……《ミサ曲口短調》の冒頭においても、あの緊張感を作り出すのはその場の気合いではない。事前の作り込みの極端なまでの徹底の度合い、合唱団一人一人の技術レベル云々ではなく、合唱団全体に自分の意思をどれほど徹底的に浸透させ、練習させたかにかかっているのだと思う。(同書)。ただし、リヒターによる《口短調ミサ曲》の音源は1960年代に複数あり、演奏様式も異なってくるが、合唱の精度としては1961年のスタジオ録音が最も高いと思う。

2. アンサンブルの場合

室内楽のアンサンブルについて森悠子に以下のような興味深い記述がある(『ヴァイオリニスト 空に飛びたくて』春秋社、2010)。「一人一人が他人に頼らずに自分の音を出し、しかも全体として1にならなければならない(そろろうとか合うということではない)。そうした中でまずパートとしてまとめ、さらに他のパートと一緒に、音楽的に美しい響きを生み出すという感覚を養う。聴き合いの精神である。他人の呼吸を聞いて、どの

ように自分は応えられるか」、「もう一つ重要なファクターは、拍感。聴いていて自然な音楽の波をアンサンブル全体で作り出すには、音楽のフレーズについてのイメージをメンバー全員が共有していなければならない。それさえあれば、拍を示すリーダーがいなくても、あるいはお互いに目とか身振りでも合図しあわなくても、音楽の流れは乱れることなく進むものである」、「とにかく、技術で合わせるのではなく、あるいは合わせようとする意識ではなく、各自が奏でる音楽が寄り添うかたち、これこそ私が望むアンサンブルの核心にほかならない」。

ここで表現されるアンサンブルの神髄は、高度な技術を持ったプロにのみ可能なレベルなのだろうか。また、弦楽合奏と(アマチュアの)合唱の間には演奏するという行為の中で根本的な差異があるのだろうか。確かにミュンヘン・バッハ合唱団と森悠子が率いる長岡京室内アンサンブルでは、演奏する楽曲も時代背景も異なり、強烈な個性の指揮者を中心とした統率性および一体感に対して自由闊達な室内楽といった感じで、対極的と思えるほど異なった印象を与える。しかし、前者に対して虚心に歌う喜びと互いに響き合い溶けあうハーモニーの妙を私は感じる。その結果、両者の表すものはかなり等質なものであると私は受けとめる。

3. 鈴木雅明の演奏

バッハコレギウムジャパンを率いる鈴木雅明は「理想の楽器」としての合唱について次のように強調している。「合唱は、ぼくにとって、ほんとうに理想的な“楽器”なんですよ。対位的なことでもできるし、自由に好きなところで好きなだけクレッシェンドしたり、ディミヌエンドして引っ込めたりできる。自由自在なんですね。しかも、オルガンと違って、言葉がありますし。そういう意味で、とても充実したすばらしい“楽器”なんです」、「それぞれのパートの人が、自分が何をどういう位置で弾いているか、歌っているかという相対的な位置関係を的確に理解しておかないと、うまくいかない」、「バッハはアマチュアではできないんですよ、技術的に。とくに日本ではね」、「バッハの合唱音楽は、プロフェッショナルな訓練を経た高度に声楽的な技巧がないと、望むべき表現に到達できないものなんですね」、「(口短調ミサ曲は)対位的な絡み合いとか、そういう技法上の困難さという意味ではなく、とにかく、単に楽曲に従って演奏していけば終わるといような感覚ではとうてい意を尽くすことなどできない、そういう面がある。一曲一曲について新たに彫刻しなければならなくなるようなディテールが異様にたくさんあって、だから非常に演奏しにくいんです」(鈴木雅明・加藤浩子『バッハからの贈り物』春秋社、2002)

バッハコレギウムジャパンは少人数プロの合唱であり、その人数は各パート3~6人、《口短調》も18人で演

奏している (S1*3, S2*3, A*4, T*4, B*4)。近年のバッハの合唱スタイルとしてはむしろ多い方であり、合唱の集団としての音を理想の楽器として追い求めた結果であると考えられる。その演奏はまさに精緻であり、細部までクリアーで非常に微視的な一種顕微鏡的な世界と、全体的な楽曲構成が見通せるメリハリの効いた構造的な世界が両立する希有なものである。数あるピリオド楽譜「古楽器」演奏の中でベストワンとって言い過ぎではないだろうし、まさにプロの技である。また、鈴木自身、芸術家というよりも職人的な仕事としてキリスト教音楽に召されていると、自らを語っていることも興味深い。

4. アマチュアではだめなのか

それではリヒターの演奏は既に過去の遺物であって、完全に鈴木氏の演奏に凌駕されてしまったのであろうか。アマチュアの合唱はバッハの世界では出る幕はなく、悲しいかな東京バッハも遠からず解散の憂き目を見るのだろうか。

合唱団員である立場から、もちろんこれを肯定するわけにはゆかないが、私は断固「否」を唱えたい。その理由ないし否定に至る後押しは、やはりリヒターとミュンヘン・バッハ合唱団にあると思う。リヒターの演奏が鈴木氏のそれよりも優位にある点は、厳粛な感動という言葉に集約されると思う。50年近い時代背景の差がある演奏に対して簡単に優劣を決めるわけにはゆかないが、現在の時点からの評価として、リヒターの演奏には時代がか

った大仰な面が少なからず認められることも確かである。しかし、ライブにおいてそれがまさに感動のつぼと化した事例が知られている。

1969年リヒター来日時の《口短調ミサ曲》ライブ録音(1969.5.9 東京文化会館)を聴くと、1958年の《マイ》録音から時を経てその指揮ぶりも変わり、テンポの動きの多いダイナミックな演奏である。特筆されるべきは、第20曲「幸なり」Benedictusにおけるヘフリガー(T)の切々たる絶唱であり、まさにここが《口短調ミサ曲》の核心であるといわんばかりである(演奏時間が6分05秒であり1961年のスタジオ録音よりも1分以上長い。前後の「ホサンナ」は3分16秒と3分04秒でテンポが異なる。またVnのオブリガートも通常のFlのものよりも哀切感が極まる)。このライブ演奏ではミュンヘン・バッハ合唱団も一部に荒さがあり、1961年録音のように完璧とはいえないが力強く鳴っている。当時以下のような評があった。「合唱における自発性は日本の合唱団の見習ってほしいところである。そこにはいかにもアマチュアらしい音色の中に、バッハを通して自己との誠実な対話と聴衆への素直な語りかけがあった。暗譜をしている人、譜面にかじりついている人、そのさまざまな姿勢の中に、音楽をするよろこびを、リヒターはひとりひとりから強烈に引き出している」(畑中良輔、朝日新聞1969.4.30、CDの解説文より)。

同年9月の映像音源において、来日しなかったテッパー(A)が、今度は第22曲「小羊 世の罪除く者」Agnus

表1 《口短調ミサ曲》BWV232の演奏比較(演奏時間)

	指揮者	録音年月	1	4a+b	前半	15	17a+b	20	22	後半
1	シェルヘン	1959.4-6	14'46"	7'18"	67'12"	3'57"	9'11"	7'09"	5'28"	67'26"
2	リヒター	1961.2-4	12'11"	6'49"	61'53"	4'28"	7'20"	4'56"	6'37"	61'00"
3	クレンペラー	1967.10-11	13'41"	7'41"	67'32"	5'02"	9'06"	5'39"	6'30"	68'13"
4	リヒター	1969.5.9	10'45"	7'04"	60'58"	4'24"	7'11"	6'05"	6'01"	62'33"
5	リヒター	1969.9	10'56"	7'07"	62'08"	4'29"	7'15"	5'53"	6'50"	65'43"
6	ミュンヒンガー	1971	9'39"	6'41"	59'56"	4'30"	7'26"	4'44"	5'35"	59'46"
7	ガーディナー	1985.2	9'29"	5'48"	51'52"	3'45"	6'06"	4'49"	5'47"	54'34"
8	大村恵美子	1992.12	9'47"	6'02"	56'27"	3'53"	6'15"	4'49"	5'19"	54'01"
9	ヘンゲルブロック	1996?	11'28"	6'16"	56'20"	3'34"	5'41"	4'27"	5'41"	52'55"
10	ネルソン	2006.3	9'00"	5'50"	51'41"	3'38"	5'58"	4'22"	5'25"	52'51"
11	フェルトホーフェン	2006.12	10'35"	5'57"	53'30"	3'32"	6'08"	4'31"	5'10"	52'45"
12	鈴木雅明	2007.3	10'33"	6'30"	53'58"	3'51"	5'57"	4'03"	5'15"	54'33"
13	ブリュッヘン	2009.3	9'30"	6'40"	54'50"	3'54"	6'13"	4'09"	5'13"	51'31"
14	大村恵美子	2011.5.15(抜粋)	-	-	-	4'09"	7'08"	5'08"	5'31"	61'07"

網掛けは、最長と最短のもの。上段の曲番号は、新バッハ全集改訂版による。

上記演奏の合唱団 1:ウィーン・アカデミー合唱団, 2:ミュンヘン・バッハ合唱団, 3:BBC合唱団, 4:ミュンヘン・バッハ合唱団, 5:ミュンヘン・バッハ合唱団, 6:ウィーン・アカデミー合唱団, 7:モンテヴェルディー合唱団, 8:東京バッハ合唱団, 9:Balthasar-Neumann合唱団, 10:ノートルダム大聖堂聖歌隊, 11:オランダ・バッハ合唱団, 12:バッハコレギウムジャパン, 13:カペラ・アムステルダム, 14:東京バッハ合唱団

Dei をやはり切々と歌っていて、この曲の最長時間を記録しているのも対を張ったようで面白い。さらに、第6曲「み神に謝しまつらん」Gratias と第23曲「平和をわれらに」Dona nobis pacem では終わりから12小節目で突然テンポを落とし、いったん間を開け、最後のクライマックスへ突入している。また、これはリヒターのどの音源でも同じだが、第19、21曲「ホサンナ」の終盤でS1にのみ現れる軽やかに天使のように降り注ぐ8小節のフレーズを、さりげなくしっかりと目立たせている。このようなリヒターの演奏法は近年のガーディナー以降の快速演奏ではみられなくなった。これらは少人数のプロによる合唱であり、多くの場合はクリアーで速くよどみのない声色であり、室内乐的に精密である。

しかし、バッハの声楽曲では多くの声が混じり合い溶け合ったときの力強さと響きの美しさが大事であると私は考える。ある程度多人数での合唱となると、言葉を明瞭にするためには必然的に中庸以下のテンポとなることも、この場合は適切である。

5. 理想の演奏を目指して

我々ができる理想の演奏を考察するために、手元にあった《口短調ミサ曲》の全音源の比較を試みた(表1表2)。1980年代のガーディナーの演奏あたりを境に、ピリオド楽器の演奏が主流となり、小人数プロの合唱団を使ったテンポの速いものが多くなる。各声部の絡み合いを明瞭に浮き立たせるためにあえて部分的に1人で歌う演奏もみられ、第15曲「主は甦りたもう」Et resurrexit の中間部バス斉唱は独唱になるものが多い。アリアも比較的あっさり歌われるものが多く、感情移入の激しいソリストは要求されないようである。ガーディナー以前の往年の名指揮者によるものでは、リヒター以外に、クレンペラ

ーのものがとにかくゆっくりで立派であるが、合唱団の精度は高くないように聞こえる。一世を風靡したミュンヒンガーのものもゆったりと無理のない演奏である。しかし私にとって最も参考になるのは、冒頭に記したようにリヒターのスタジオ録音のものである。テンポが中庸で思わず歌ってしまう。この演奏は50年を経過したにもかかわらず、一つの規範として現在でも屹立していると思う。なお、個々の演奏については、下表に演奏時間の比較も含め簡単に述べている。

厳粛な(宗教的な)感動を求める演奏においてはリヒターをしのぐものは得難いし、どう考えても現代風ではないだろう。むしろスウィングが効いて、技術的に完璧で、瞬発的なノリのよい演奏に希望があるのではないかと思う。この観点からすると日本語の意外性もあり、ひょっとすると東京バッハの出番かもしれない。鈴木雅明の言う日本でのアマチュアの困難さがドイツ語ないしラテン語の壁を意味するのであれば、東京バッハはそれを既にクリアーしているといえるだろう(訳出を含め日本語で歌う難しさは別問題として)。実際に、19年前の東京バッハ合唱団の演奏は、なかなか熱演であり技術的にも現在より大分上である(今も現役の方々はお分かりだろうが)前半の最後、第9b曲「み霊とともに」Cum Sancto では素晴らしい盛り上がりみせ、直後に会場から拍手が起こっている。また、ノートルダム大聖堂におけるネルソンの演奏もとにかく速いが、ノリがよく一つの参考事例として活かせるかもしれない。合唱団やオケのメンバーの表情が実に豊かで生き生きとしている。

私は、スウィングの効いたバッハ演奏というとG・ゴールドのピアノを思い浮かべる。特に、よく弾き分けられた各声部が一定のリズムと音型でクッレシエンドしながら盛り上がってゆく様は(例えば《イギリス組曲》第

表2 《口短調ミサ曲》BWV232の演奏比較(特徴・評価等)

	分類	全体の特徴	目立つ点	合唱の規模・評価	その他
1	現代	19世紀的	古色蒼然	大人数、精度は高くない	20.の伴奏はVn
2	現代	整然とゆるぎない	テッパ ^o -(A)	大人数、一糸乱れぬ迫力	20.の伴奏はVn(他の演奏も同様)
3	現代	重厚かつ長大	特にゆっくり	大人数、声が荒い	聴き応えあり
4	現代	強烈で感動的	ハリガ ^o -(T)20余韻最高	女63男31位、Tが荒い	来日ライブ録音
5	現代	安定したリズム	テッパ ^o -(A)22で最長	女70男30位、まなざしが良い	教会での映像+録音
6	現代	ゆったりと無理ない	アメリカ(S)、アドレ(Trb)	大人数、立派な歌いぶり	Sに軽やかさと透明感がほしい
7	古楽器	颯爽とし勢いがある	強弱や緩急のめりはり	少人数、洗練されている	快速演奏の先駆け
8	現代	きびきびした熱演	(ラテン語)	女57男28、今よりかなり上手	[創立30周年記念公演]
9	古楽器	純度高かつ迫力あり	3拍子は皆速い	少人数、特に男声が上手	15.はバス斉唱、F1は落ちる
10	現代	表情豊かでのってる	速い、合唱Aにも男性	38人、上手だが後半乱れ	美女多い、村々の前後で移動
11	古楽器	室内乐的に精密	音の分離がよい	10人、声色が美しい	一部は各パート一人
12	古楽器	精緻・透明かつ構造的	メリハリが効く	18人、とにかく上手	高密度で濃縮されている
13	古楽器	淡泊で控えめな演奏	あまり特徴がない	女15男12、Bが弱い	歯切れが悪い
14	現代	発展途上[日本語演奏]	(曰く言いがたい)	約40人、Tが弱い	[荻窪音楽祭](後半のみ)

2番のプレリュード), 思わず身体が反応してしまうような疾走感~躍動感にあふれている。弱音部でのリリズムあふれるピアノタッチや, 立ち止まってしまうような微妙な「間」の付け方等々, 我々の理想の楽器である「合唱」でその一部だけでも醸し出すことができないものかと思うところが多々ある演奏である。

大それた望みはひとまず置いておいて, 我々のできるところからひとつひとつ積み上げてゆくしかない。まず必要なことは個々の楽曲に対するイメージの統合であり, お互いに聴き合い, 寄り添う気持ちである。当然ながら, 各メンバーの技術と楽曲理解を土台とした心の余裕も要求されるし, 各パートでそれを共有できる態勢を整えることも大切である。ここが聴かせどころだという共通認識があれば, 必然的にそこへ向かって盛り上がるだろうし, 他のパートは引き立て役にまわるはずである。

*

もう一つ大事なことは, コンサートホールでお客様に聴いて頂くにあたっての「見ばえ」「聴きばえ」も考慮することである。プロの管弦楽に負けない音量と音質を確保することはアマチュア合唱団といえども最低限のお約束であろう。さらに「この合唱団, なかなかいいね」と思わせるような, 見せ(魅せ)かつ聴かせる「わざ」にも工夫が必要であると思う。《口短調ミサ曲》を例にとれば, 筆者の独断と偏見ではあるが, こんな感じはどうだろうか。

3拍子の曲は1拍目の拍感を強調する。

場合によっては身体をスウィングさせるのも見ばえの上で有効である。練習を後ろから見てみると, 何人かの方は既に実践しているようである。あくまで自然な感じが必要でありマーチングバンドのように無理に合わせる必要はない。(4a, 9b, 15, 19, 21)

16分音符の細かいパッセージをきびきびと歌う。

各パートの聴かせどころであるので練習あるのみ。

強弱のコントラストを強調する。

各パートの音量比や声の通り具合も関係するので, 全体のバランスが重要である。例えば, 同人数で歌う場合, アルトはソプラノに比べ沈んでしまう傾向にある。以前にいた合唱団のドイツ系客演指揮者が「ピアノの箇所は話すように歌い, 声の力は落とさないように」と指導していた。むしろ, 強調するパートを指定し, それ以外は引っ込めといった方が分かりやすいかもしれない。

クレッシェンドを強調する。

と関連するが, 長い上昇音階でフォルテに至る箇所は, だんだん速くする意識も持ちながら歌うと, グールドの疾走感に通じるものが出てくるかもしれない。場合によっては, 意識的にテンポを落として半数位で歌い始め, 途中から全員でというやり方もあるかもしれない。これも練習あるのみ。(9b, 15, 17b, 18b)

延ばす音を工夫する。

何小節にもわたって延ばす音には, 皆で声をそろえながら中間に膨らみを入れて情感を込めて歌う。イメージを共有するところから始めなければならない。

曲の出だしをそろえる。

練習では, フライイングを恐れずに自分で拍をつかんで飛び込む勢いが大切であり, 後出しじゃんけんでは進歩しない。伴奏無しの場合は指揮者のタイミングを捕まえて出るほかはないが, 音程が決まらなさと悲惨である。音程の確かな者がパート内だけで聞こえるように直前に音を出し, 皆がそれに合わせるやり方がある。(3B, 6B, 10T, 11全, 15全, 18a全, 19・21全, 23B)

指揮者をとにかく見る。

リヒターの映像音源では, 合唱団の食い入るように見つめるまなざしが印象的である。暗譜しているのではなさそうで, 歌い出す直前に譜面に短時間目を落としている人が多い。自分のことは棚に上げるが, 飛び出すタイミングを音楽の流れの中でつかんでいないと譜面から目を離せなくなる。これが実現すれば, 合唱団の見ばえが断然違ってくるはずである。

日本語を理解して歌う。

当合唱団の「売り」であるが, これが実は一番難しいのかもしれない。歌詞に対する思いを共有して合唱するくらいは実践したいものである。

東京バツ八合唱団 今後の活動予定

2011年

< 創立50周年記念企画 第1シーズン >

- ・12月3日(土) 第106回定期(創立50周年記念-1)
14:00 開演、杉並公会堂大ホール、《口短調ミサ曲》
- ・12月5日(月) [練習] 開始《マタイ受難曲》
- ・12月25日(日) 荻窪教会クリスマス礼拝、グローリア

2012年

< 創立50周年記念企画 第2シーズン >

- ・1月 5月 [練習] 《マタイ受難曲》
- ・5月 小演奏会《マタイ受難曲》抜粋
- ・6月 11月 [練習] 《クリスマス・オラトリオ》前半
+ カンタータ BWV 71
- ・7月 創立50周年記念祝賀会
- ・8月 野尻湖合宿 & コンサート
- ・11/12月 第107回定期(創立50周年記念-2)
《クリスマス・オラトリオ》前半 + BWV 71

2013年

- ・春 第108回定期(創立50周年記念-3)
《マタイ受難曲》

< 創立50周年記念企画 第3シーズン >

- ・12月 第109回定期(創立50周年記念-4)
《クリスマス・オラトリオ》後半

2014年

- ・春 第110回定期(創立50周年記念-5)
《ヨハネ受難曲》

< 団員募集 >

第2~3シーズン(2012年~2014年)の合唱参加者を募集しています。参加要綱を事務局までご請求ください。

シュトゥットガルトからのお便り

2009年8月の第5回ドイツ演奏旅行に際し、現地においてお世話に当たられた南吉衛牧師(翌年帰国、現在、日本キリスト教団桑名教会牧師)のもとに、今夏とどいたメッセージです。南先生より事務局に転送されたものを、団員の森永毅彦さんに翻訳して頂きました。

ヴェンガー夫人(シュトゥットガルト・パウロ教会役員)

南吉衛牧師あて(抜粋)

..... 8月には毎年いつもあの素晴らしかった日本の合唱団のシュトゥットガルト来訪の日々がめぐってきます。私自身は残念ながらその場に居合わすことができませんでしたが、大村さんが、ご夫君とシュトゥットガルト公演の準備のために、その前年当地を訪ねて来られた折にお会いしました。そのときのことをとても懐かしく想い起こします。この大いなる女性の面識を得ることができましたことは、私のよろこびです。.....

ウルリーケ・ゲッケルマン(ムターハウス・シスター長)

南吉衛牧師あて(抜粋)

..... 私はあの素晴らしいコンサートと、よき出会いの数々を、いまもなつかしんでいます。合唱団の皆さんが心を尽くして歌っていらした姿が眼前に浮かんできます。たしかに聴く者の胸に迫ってくるものがありました！とくに記憶に残っているのは、羊飼いと小羊の歌(宗教歌曲集 BWV 507《愛するわが羊 いずこに迷いし》)それから男声のソロ(カンタータ第8番バス・アリア《失せよ おろかにむなしき憂い》)です。(.....中略.....)大村様と合唱団の皆様のご多幸をお祈りします。その旨どうぞよろしくお伝えください。.....

シューベルト 《水の上にて歌える》

野尻湖の日々の思い出に

大村 恵美子

何十年もの間、夏には合宿とコンサートをして、第二のふるさとのように親しんでいた野尻湖では、私の心中にシューベルトの、この曲“Auf dem Wasser zu singen” op. 72がよく鳴り響いていました。

やがて団員の何人かが「ばっはめいと」の個人レッスンで、シューベルトの歌曲なども学ぶようになり、野尻湖合宿中のミニコンサート(団内での内輪のコンサート)で歌う方も出るようになりました。でも、いつもドイツ語で歌われたので、この曲を知らない人には、伴奏のさざなみのようなムードは感じられるものの、ことばの内容までは察しがつかないでいました。

私はこの夏、合宿後に、宿のご主人の石田良和様のおはからいで、対岸の船着き場近くの藤屋旅館3階の一室

に招待されて、ひとりで一泊し、より広大なスペクタクルの享受できる夕方から朝まで、広い座敷の中から、湖に展開する太陽の移り変わりをつぶさに体験することができたのです。それがまた、シューベルトのあの歌の詩(作詞:シュトルベルク伯レーオポルト?)に、あまりにもぴったりだったのに、感銘をおぼえました。

その2日前のミニコンサートで、この曲を歌ってくださった松尾茂春さんに、どんなことが歌われているのか、皆さんにざっと紹介していただけますか、と尋ねて、要約を話していただいたのですが、やはり曲の進行と同時の理解でないことが、とても惜しい気になったのです。

帰京後もずっとわだかまっていた、ついに訳詞を試みてしまいました。シューベルトにまで日本語をつける作業は、これまで考えたことがなかったのです。9月に入って、練習時に皆さんに歌っていただきました。有名な曲ですので、初見からみごとに日本語で歌われてとてもうれしかったし、来年からも、野尻湖の現場で歌って楽しみたい、とさらなる希望もわいてきた次第です。その訳詞を、ここにご披露しておきます。

1. 水面(みなも)に さざなみ揺れ
白き小舟(おぶね) 浮かびぬ
わが胸に よろこび燃え
舟とともに ゆらぎゆく
舟をめぐり みそらより
注ぎおどる夕映え めぐりおどる夕映え
2. 西の森の こずえに
誘(いざの)う赤き 入り日よ
畔(ほと)りの あやめに
ささやく赤き 入り日よ
よろこびと 安らぎを
われに満たす夕日よ われに満たす夕日よ
3. はや沈む このひと日
つばさ波に 浸して
あしたにも 夕べのごと
つばさもて 沈みゆかん
飛びすすむ つばさに乗り
われも移り去るべし われも移り去るべし



写真: 松尾茂春氏(団員)

故辻 莊一さんのこと

一九八七年四月二十一日午後十時、九十一歳の生涯を閉じられた私たちの恩師、辻 莊一(つじ・しゅういち)先生については、新聞として何かにつけては、指導いただいた。東京バツハ合唱団主宰者である私は、合唱団月刊(第二九九号)(五月号)を全面「辻 莊一先生追憶記念号」とし、次いで第三〇〇号(六月号)でも、「辻 莊一先生の二冊の「バツハ」と題する私の文章で、辻先生の戦後四十年間のバツハとのかかわりについてふりかえりについて、また同じ等の巻頭にバツハ合唱団誕生二十五周年を祝う文章を寄せてくださった杉山好先生も、辻先生のごこと深く思いを致され、次のようにしめくくっている。

「折しも、この合唱団の精神的な生みの親……辻 莊一先生が、九十一歳の天寿を全うして世を去られた。……先生の越くべき学問的探究精神とバツハへの情熱的傾倒は、自身の死を越えて私たち二十世紀末から二十一世紀にかけての、新しいバツハ・プロフィール(顕彰)への前進を促しておられること

バツハへ情熱的傾倒

大村 恵美子



バツハへ情熱的に傾倒し、ゲーテのようにスヴェールの大きな足跡を残した天らかな明治的人間

せむこと、そしてこの「もといてみた。……二月校卒業に生まれ、旧制神戸第二中学校、旧制第七高等学校、東京帝国大学文学部心理学科を卒業後、立教大学で、一九六一年名譽教授となるまで一貫して教鞭をとる。この間東京大学、東京芸術大学、津田塾大学、九州大学、日本大学、鳥取大学、島根大学、鳥取大学、国際基督教大学等の講師を兼任。その後国立音楽大学教授、鹿野川学園理事長

普遍的性格の持ち主

者バツハを教会史と音楽史の流れのたまたまでの出来事として説明するものであり、二つにはその中心からしてバツハをいよいよ日本人の魂の深みに探つか

とバツハとの関連は緊密なものがあるが、しかしゲーテのようにスヴェールの雄大な先生の足跡は、おそらくまたまた多岐にわたって紹介されなければならない。私は五月二十三日に立教大学神学聖徒礼拝堂で行われた辻先生の立教大学葬のパンフレットの中から、改めて先生の略歴その他をひ

会音楽「フィルハーモニー」思想「山」山岳等の雄辯論文多岐、と、牧事にいとまがない。また一九一八年鹿野川聖三一教会で受洗し、神職の行われた目白聖公会で教会生活と深い信仰を抱いて来られた。これだけの発行量と広がりには、何と云っても先生の、まことに愛すべきお人柄、あらゆる存在に結びつく親和感と学究的好奇心、探究的態度、そして調和的な統率力・実行力を兼ねそなえたまれに見る普遍的性格によるものであり、感嘆を禁じ得ない。天らかな明治的人間の最も昇華された典型ではあるまいか。こうして見るとまた、中部ドイツの地方都市に生ながら時代のほざかぬ驚異的な國際的・普遍的音楽を、宮廷・教会・学校・都市のあらゆる階層の人々と手を組んで、この世に放出しつづけたあのJ・S・バツハの姿と、辻 莊一先生の生涯が再び重なり合っている。 (筆者：おむら、えみこ「東京バツハ合唱団主宰者・指揮者」)

天国の椅子

「折しも、この合唱団の精神的な生みの親……辻 莊一先生が、九十一歳の天寿を全うして世を去られた。……先生の越くべき学問的探究精神とバツハへの情熱的傾倒は、自身の死を越えて私たち二十世紀末から二十一世紀にかけての、新しいバツハ・プロフィール(顕彰)への前進を促しておられること

キリスト新聞 1987年7月18日号

小生 病気のため、ご迷惑をおかけしてすみませんでした。おかげで昨日退院自宅で静養ということになりました。この点ご放念下さい。血液のはたらきが 常人の5/6になってしまったので閉口しています。しかし秋には何とか貴意にそうすることができるかと思ひます。
島島区目白 4-18-4
辻 莊一
4月2日

世田谷区 赤堤 1-29-8
大村 恵美子 携
小生 病気のため、ご迷惑をおかけしてすみませんでした。おかげで昨日退院自宅で静養ということになりました。この点ご放念下さい。血液のはたらきが 常人の5/6になってしまったので閉口しています。しかし秋には何とか貴意にそうすることができるかと思ひます。
島島区目白 4-18-4
辻 莊一
4月2日

バツハ合唱団をとりまく人々 [第6回] 追記

1987年は、合唱団創立25周年に当たり、今回と同じく《口短調ミサ曲》をとり上げました(原語上演)。当合唱団としては、このときが初演です。
年末の公演にむけ、辻先生を講師にお迎えして、春ごろに公開のゼミナールを予定していました。先生も乗り気になっていらっしやいましたが、前年末に発病。退院のご通知をお書きになった日から1月も経ずに、お亡くなりになりました。
「秋には何とか……」の文面に、先生のお人柄が忍ばれます。